29　心あてに　折らばや折らむ　初霜の　置き惑はせる　白菊の花

凡　河内　躬恒

〈声に出してよんでみよう〉

ココロアテニ　オラバヤオラン

ハツシモノ　オキマドワセル　シラギクノハナ



白菊の花

＊ワ行オ段の「**を／ヲ**」は、古語では［wo］と発音し、助詞以外の一般の語にも用いられていました。11世紀初め頃、ア行オ段の「**お／オ**」が［o］から［wo］に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに17～18世紀頃、両者ともに［o］と発音されるようになり、現在に至っています。

＊「**む**」は、「**ン**」とよみます。古くは、撥音の「ン」にあたるかなはなく（五十音図やいろは歌[1]にも「ん」の文字はありませんね）、「む」で代用したり、表記しなかったりしていました。

＊語頭以外の**ハ行**の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、**ワ行音**「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[2]　「初霜」の「は」は語頭ですから「ハ」、「惑はす」の「は」は語中ですから「ワ」とよみます。

＊初句の「心あてに」の、音の数を数えてみましょう。「コ・コ・ロ・ア・テ・ニ」。６音ですね。これは、「５・７・５・７・７」の定型からはみ出してしまっています。このような場合を「**字余り**」と言います。反対に、足りない場合は「**字足らず**」と言います。しかし、どちらの場合も音読する時はあくまでも「５・７・５・７・７」のリズムに乗せて読みます。このため、字余りの歌には切迫感が、字足らずの歌には空白感が、生まれるという効果があります。

〈どんな意味だろう〉

当て推量で、折るならば、折ろうか。

この冬初めての霜がおりて、（霜も花も同じように真っ白で、見る人を）惑わせる白菊の花を・・・！

＊「心あてに」は、当て推量で、当てずっぽうに、という意味です。白菊の花を手折ろうと思っても、霜も花も同じように真っ白なので見分けがつかない、だから、折るならば当てずっぽうで折ろうか、ということになるわけです。

＊**初霜・初雪・初詣で・初鰹**・・・。これらの「**初～**」という言葉は、その物事が、その年、あるいは、その季節、初めてであることを表します。この歌の「初霜」は、冬の到来を告げています。なお、霜や露が「おりる」ことを、古語では「置く」と言いました。

＊第２句「折らばや折らむ」の最後の「む」は、意志を表す助動詞で、ここが文末になります。このような歌の構造を「**２句切れ**」と言います。第３・４・５句は、**倒置**されています。倒置とは、通常とは逆の語順で表現することで、最も強調したい部分を先に述べる技法です。また、この歌は「花」という名詞で終わっていますが、このような技法を「**体言止め**」と言います。名詞は、体言とも言うからです。通常の文は、体言ではなく、動詞や形容詞といった用言、助動詞、助詞などで終わります。このため、「体言止め」は、あとにまだ何かが続くような感じを与え、**余情・余韻**を生み出す効果があります。

〈解説〉

この歌については、評価が真っ二つに分かれています。霜と菊と、白さで見分けがつかない、という点を、斬新で面白い着想だ、初冬の清冽な空気を見事にとらえて

いる、と高く評価する人々と、現実には到底あり得ない、大げさでつまらない嘘だ、と非難する人々がいるのです。前者には、この歌が詠まれた『古今和歌集』（905 年頃成立）の時代の人々や、「百人一首」（13 世紀頃成立）の撰者の藤原定家などが含まれます。後者の代表は、明治時代に和歌／短歌の革新運動を起こし、写実主義を唱えた、正岡子規（1867-1902）です。さて、あなたは、どちらの意見に賛成しますか？

〈作者と出典〉

作者の凡河内躬恒は、平安時代前期、９～10 世紀頃の代表的歌人の一人です。最初の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『古今和歌集』の、撰者の一人でもあります。[3] この歌の出典も『古今和歌集』です。

---

1 「いろは歌」は、10世紀末から 11世紀頃成立したと考えられているもので、当時使われていた かな 47文字を１度ずつ使って作られた、次のような歌です。

いろはにほへと　ちりぬるを　わかよたれそ　つねならむ

うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　ゑひもせす

現代では使われていない かな がありますね。「ゐ」はワ行イ段、「ゑ」はワ行エ段の音で、現代ではそれぞれ「イ」「エ」と読みます。また、当時は、清音と濁音の区別は表記上はありませんでした。濁点や漢字をあてはめて意味を示すと、次のようになります。

色は匂へど　散りぬるを　我が世誰ぞ　常ならむ

有為の奥山　今日越えて　浅き夢見じ　酔ひもせず

また、発音は次の通りです。

イロワニオエド　チリヌルオ　ワガヨタレゾ　ツネナラン

ウイノオクヤマ　キョーコエテ　アサキユメミジ　エイモセズ

内容は、仏教の経典から採られたものと言われ、現代語では大体次のようになります。

花の色は美しく輝いているが　花は散ってしまうのに

この世で一体何者が　常に変わらずにいられるだろうか（すべては無常である）
いろいろの因縁により生じるこの世を　今日生きて（しかしいつかは死んでゆく）
浅い夢を見たりはするまい　幻のようなこの世に酔ったりはしない

但し、ここで示した以上の解釈には、異説もあります。

[2] ハ行の子音は、8世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。

[3] 『古今和歌集』の撰者には他に、紀貫之（→「35 人はいさ」）、紀友則（→「33久方の」）、壬生忠岑（→「30有明の」）がいます。